

十字御書

弘安四年一月五日 六〇歳

むしもち 十字一百まい・かしひとこ給び了んぬ。正月の一日は日のはじめ、月の始め、としの
はじめ、春の始め。此をもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく、日の東より
西へわたりてあきらかなるがごとく、とくもまさり人にもあいせられ候なり。

抑 地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば、或は地の下と申す経もあり、或
は西方等と申す経も候。しかれども委細にたづね候へば、我等が五尺の身の内に候とみ
へて候。さもやをぼへ候事は、我等が心の内に父をあなづり、母ををろかにする人は地
獄其の人の心の内に候。譬へば蓮のたねの中に花と菓とのみゆるがごとし。仏と申す事
も我等が心の内にを御座はします。譬へば石の中に火あり、珠の中に財のあるがごとし。
我等凡夫はまつげのちかきと虚空のとをきとは見候事なし。我等が心の内に仏はを御座
ましけるを知り候はざりけるぞ。たゞし疑ひある事は、我等は父母の精血変じて人とな
りて候へば、三毒の根本、淫欲の源なり。いかでか仏はわたらせ給ふべきと疑ひ候へど
も、又うちかへしうちかへし案じ候へば、其のゆわれもやとをぼへ候。蓮はきよきもの、
沼よりいでたり。せんだんはかうばしき物、大地よりをいたり。さくらはをもしろき物、
木の中より咲いづ。やうきは見めよきもの、下女のばらよりむまれたり。月は山よ
りいでて山をてらす、わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心よりいでて我
をかざる。

今正月の始めに法華経をくやうしまいらせんを思召す御心は、木より花のさき、
池より蓮のつぼみ、雪山のせんだんのひらけ、月の始めて出づるなるべし。今日本国の
法華経をかたきとして、わざわいを千里の外よりまねき出だせり。此をもってをもうに、
今又法華経を信ずる人はさいわいを万里の外よりあつむべし。影は体より生ずるもの、
法華経をかたきとする人の国は、体にかげのそうがごとくわざわい來たるべし。法華経
を信ずる人はせんだんにかをばしさのそなえたるがごとし。又々申し候べし。

正月五日

日 蓮 花 押

重 須
をもんすどのゝ女房御返事